

図書館たより

号数 第62号
発行日 昭和58年10月15日
編集 島根県立図書館
発行 松江市内中原町52
TEL (0852) 22-5725
印刷 渡部印刷株式会社



「いっすんぼうし」より

隠岐島前の読書普及

—昭和58年度モデル市町村の指定をうけて—

島前地区は、海士町、西ノ島町、知夫村の3町村ですが、昭和58年度に、読書普及活動振興モデル市町村の指定を受けたことは、時期的にも、内容的にも好都合であったと思います。

地区内には、海士町に3、西ノ島町に3、知夫村に1の計7保育所がありますが、それぞれに、本の貸出し、公民館の事業としての指導を受けたり、独自の工夫をするなど色々と読書活動の向上に努力を続けておりました。一方、県立図書館の自動車巡回による配本の恩恵を受けて、幼児のみでなく、小中学生や一般の読書普及にも力を尽しておりました。このような時期に指定を受け、特に、親子のふれ合いを深めるねらいの、親子読書に重点をおく計画実践は、従来の読書活動を深め、盛んにしました。

親子読書についてみますと、本年の3月下旬に、地区内の各保育所を訪問して、読書活動の実情を把握し、又、5月に保母さんへの一保母総会を利用し指導を実施しました。これは県立図書館から派遣の先生による適切な指導でした。これが出発点となり、

引続いて県立図書館のお母さん方対象の指導も成果があがり、その後、各保育所で、図書の貸出しによる親子読書活動は順調に進みました。保母さん方は読書指導に大変な力の入れようであることが、お話をうかがう度にわかり嬉しく思ったところです。

その実践の状況は、アンケート調査により、保育所の立場から、又、保護者の側からと色々と示され、困った点、良い点等が解っていますが、これは、中間研修として9月中に話し合いの機会を持ち、県から講師先生のご来島を待ち指導を受ける計画であります。

現在この親子読書活動が機縁で、公民館のお世話により、月1回親子の集いがもたれ、人形づくりや、ケーキづくり等、親子と一緒に楽しみ、ふれ合いを深める活動にまで発展している保育所もあります。

島前地区も、読書活動の振興策としては、やはり図書センターの設置です。財政的にきびしい現在ではありますが、モデル市町村の指定を生かしてその実現に努力をしていきたいものであります。

隠岐島前教育委員会教育長 佐藤 猛

出雲児童図書館

出雲児童図書館は、子供達に夢と希望を与え、読書の楽しさと喜びを広げ育てる場として、出雲青年会議所が昭和52年7月に建設、開館したものです。

敷地面積737.81㎡、本館面積 167.5㎡の鉄骨平屋。青い八角型の屋根と、真白な壁で出来たおとぎ話のおうちのような外観です。

開館時間は、10時から午後5時半まで。休館日は、毎週火曜日・祝祭日の次の日・盆・年末年始となっています。

図書館事業として、本の貸出の他、JCメンバーと共に、毎年色々な行事を行っています。今年は「折り紙教室」を3月に開き、子供達といっしょにおひな様作りをし、図書館内に展示しました。また、来たる10月2日には、子供達といっしょに、近くの“一の谷公園”へハイキングに行き、みんなでカレーライスを作って食べたり、ゲームをしたり楽しく過ごす予定です。この「一の谷ハイキング」は、前年も行ったのですが、子供達に大変好評だった為、今年も同じ形式で行うことになりました。暮には、毎年恒例の出雲児童図書館名物の「もちつき大会」を催し、子供達といっしょになって、もちつきをしたり、きなこもちを食べたりする計画を立てています。このことは、一見読書と何のつながりもなさそうですが、校区を越えてふれあう喜びを与えることは、読書をする子供達の心にも、とても有意義なことだと考えています。

また、今年の1月から「お話教室」が、月2回開かれることになりました。これは、当図書館の前に位置する島根医大宿舍のお母さん1人が、最初に自

分から申し出られたという、うれしい出来事からスタートしました。現在は、二人のお母さんに教室をやっていますが、絵本の読み聞かせを中心として、紙芝居、指人形を使ってのおしゃべり等その意欲的な活動に我々一同本当に感謝しています。お母さんが自主的に行なわれる「お話教室」が、親子読書の和を広げる為の一つの起点となって、ますます盛り上がって行くのを感じています。「お話教室」を親子で聞きに来る方も多く、これから先も、ずっと、この場が親子のふれあいの場となり、親子読書への関心が高まることを希望しています。

現在、当図書館の蔵書は約11,500冊、年間登録者数約 4,400人、年間貸出冊数約61,500冊です。

当図書館は出雲市西部に位置し、東部には出雲市立図書館があります。利用者は西部の方が断然多く、最近では東は斐川町、西は多伎町まで広範囲に広がっています。

当図書館は、書棚以外のスペースをなるべく広く取り、雰囲気も明るく自由に読書できるよう心がけています。戸外での遊び場が年々少なくなる今日、子どもたちに安全で楽しめる場所を確保してやりたいものです。

当館に来る子どもたちが、ここで本と出会い、楽しみながら読書をし、その喜びを見出すことができるよう毎日の業務に励んでいます。

活躍する児童図書館(2)



— 最近話題になっている図書から —

木簡が語る日本の古代

東野治之 著 岩波書店 430円

奈良時代の役人が今でいう使い捨てカードとして用いた木簡が、近年全国各地で発見されている。このなかには日本古代史についての従来の学説をくつがえしてしまう内容をもつものもあり、古代史研究に新しい史料群を提供している。もちろん発見される木簡の大部分は偶然に残ったもので内容は断片的である。しかも、一千年以上土中に埋まっていたため判読できないものも多い。

本書はこの断片的な木簡の記述から、これを書いた奈良時代の下級官吏の実態などを紹介した歴史エッセイ集である。手習いに使われた木簡から、当時の役人が使用していた受験参考書をさぐり出す。また役人の勤務評定を記した木簡から、当時の役人の人事が能力主義だったのか、年功序列だったのかを考察する。このほか「平城京への単身赴任」「乳製品を食べる古代人」「ある下級役人の生涯」など木簡の記述からうかがえる奈良時代についての興味深い研究10編を収めている。

迷走地図 上・下

松本清張 著 新潮社 各 1,200円

政界の裏側は部外者にとって皆無に近いほどわかりにくい世界だが、著者は国会議員秘書という内部に詳しい人物の目を通して、政界の内側で動く議員の実態を小説的手法で描いている。

この小説の新聞連載が終ってから、佐藤栄作元首相夫人の恋文問題がマスコミでとりあげられ、この小説の重要な鍵となる次期首相候補の大物政治家夫人と実力秘書の恋愛事件には、実在のモデルがあったのではと話題になった。しかし、著者はこの小説にはモデルはなく、各種のデータを総合して推理した物語であり、偶然合致するところがあったにすぎないといっている。ともあれ本書では、利権に奔走して肝心の国政をおろそかにする議員とか、彼らに巣くう院内紙記者、また議員が出版記念パーティーと称して出す本のゴーストライターの実態など、政界の暗い部分がかかり明みに出され、興味尽きないものがある。

新聞に見る山陰の世相百年

山陰中央新報社編刊 9,600円

明治も遠くなり、大正も歴史的過去になりつつある。それどころか、戦前戦中の昭和史を調べるのも容易でなくなった。

本書は山陰中央新報社が、創刊百年を記念して出版した、新聞を通して見た山陰の近現代史である。従来、山陰の歴史を書いたものは各種出ているが、いずれも記述の終わりは明治維新时期か、せいぜい終戦までである。そのため、特に戦中、戦後についての手ごろな書物が不足している。本書は現在となつては最も貴重な資料である新聞記事を基礎資料として、近現代史の手薄な部分のみごとに埋めている。

内容は政治、経済、社会、文化などがバランスよく配列され、読み易く面白い記述となっている。それでいて実証的態度も堅持して、興味本位に墮していないのは、ベテラン記者の筆力だといえよう。山陰近現代史を知る好著である。

七人めのいとこ

安藤美紀夫 著 偕成社 950円

6人の孫に恵まれたひさは、いっけん幸せな老後を送っているようにみえるが、心に暗い傷を押し隠している。ある日、秘密にしていた孫がもう一人いることを察知した孫達は、自分達のいとこ探しを始める。真実をつきとめようとする孫達と、かたくなに秘密を守ろうとする親達との葛藤が続く。

孫達はひさの除籍謄本をとりよせて、自分達の知らない伯母がいたことを知り戦中、戦後一家が住んでいた京都を訪れ、そこで一家に起った悲劇を知る。敗戦直後の混乱の中で、病気の父や、幼い弟妹を困窮から助けるため、キャバレー勤めをして必死で家族を養った長姉が、黒人混血児を産む。すると弟妹はそんな姉を憎み、ついに死に追いやってしまう。混血児は行方不明である。

戦争でみんな暗い過去をもっている。しかしそれは被害者意識ばかりで、自らの責任を問う加害者意識に欠けている。不都合な部分には目をそむけようとしている大人に、若者がそれをつきつけてくる。それはお互いにつらい所業である。

県下にひろがる読書会 (2)

主婦の読書会「あゆみ会」—大東町—

- 所在地 大原郡大東町 大東町立図書館
- 代表者 大東町大字大東北町 佐藤春子
- 会員数 7名
- 定例日 毎月第4日曜日 13時～15時

「よくまあ、これだけの本を読んだもの。」と分厚い大学ノート2冊にぎっしりと書いた読後感想文をみるたびに我ながら感嘆しているこの頃です。

すっかり縁遠くなった読書の習慣をつけたい、視野を広げ、又ポケの防止にも役だつのではと親しい方に呼びかけ、会が誕生したのが54年1月。「あゆみ会」と名づけてから4年7ヶ月たちました。

毎月町立図書館に集まり話しあっています。その間県立図書館の62冊の本を読みあげているのですもの、全く感無量でございます。会員は近くに住むオバサン連中で40代から60代の主婦で共通の話題も多く忌憚のない話し合いが出来ることは何よりですが、親しさのあまり、世間話ととかく走りがちになるの

を戒めることも度々。活字を一字一字追うことは大変な負担でしたが、それを乗り越えるところに自分を鍛える試練の道が広がっていること、本を読むことはあくまでも“自分との戦い”である事を常に励ましあったことでした。

「時間がない」「忙しかったので」と弱音をはかないよう時間を上手に浮かすことも主婦には大切、安易な流れにとにかく走りがちになる自分を厳しくしながら、よい本に出会った後の爽快な気分、深い感動をこの頃やっと味わえるようになったのも一冊一冊の積み重ねのおかげかもしれません。歴史的背景や著者の人となりを調べることも度々、又辞典を傍らにおいて読むこと、関連した本の紹介や新聞の切り抜きにも心がけております。問題でないことを問題と感じたり、又その逆のこともあります。「次の自分への脱皮こそ大切」とつとめて冷静に広い視野から考えていくようにしています。

「地味でもいい。細く、長く、楽しく続け自分なりの糧を得たい」と私達はささやかな願いをめざし遅々とした歩みをしております。(文責 佐藤春子)

NEWS

●郷土の歴史講座開催

7月28日(休)県立図書館において郷土の歴史講座を開催。

池田満雄講師(松江農林高校)は「考古学から見た古代の出雲」——最近の発掘調査をふまえて——。

藤岡大拙講師(県立図書館)は「尼子の家臣団について」の講演があり、80数名の参加者は身近な郷土の歴史に十分に親しんだ。

尚、羽須美村で開催を予定していた「郷土の歴史講座」については西部豪雨災害のため中止いたしました。

ごあんない

親子読書講演会

幼い日、おかあさんに読んでもらった絵本の思い出!!それは子どものすこやかな成長に大きな役割を果たします。

親子読書という素晴らしい読書活動に積極的に取り組んでいこうではありませんか。

このたび下記により親子読書講演会を開催します。このような機会はまたとないことですので、ぜひ参加されますようおすすめします。

期 日	昭和58年10月18日(火)	昭和58年10月19日(水)	昭和58年10月19日(水)
時 間	13:30~16:30	9:30~12:30	13:00~16:00
会 場	頓原中学校	玉湯町中央公民館	島根県立図書館
参加申込先	頓原町教育委員会	玉湯町教育委員会	島根県立図書館
講 師	斎 藤 惇 夫(児童文学者)		
演 題	心 を 育 て る 読 書		



期 日	昭和58年10月31日(月)	昭和58年11月1日(火)	昭和58年11月2日(水)	昭和58年11月3日(木)	昭和58年11月4日(金)
時 間	13:30~15:30	13:30~15:30	13:00~15:00	9:30~12:30	13:30~16:30
会 場	木次町農村教養文化体育施設	多伎町公民館	仁摩町中央公民館	山村開発旭センター	西ノ島町黒木公民館
参加申込先	木次町立図書館	多伎町教育委員会	仁摩町教育委員会	旭町教育委員会	隠岐島前教育委員会
講 師	佐 藤 英 和(こぐま社社長)				
演 題	子 ど も と 読 書				